東京外国語大学
留学生日本語教育センター論集　39：137～152，2013

異文化体験型シラバスに基づいた ショートステイプログラム2012の実践と課題

藤森弘子・宮城徹・中村彰・荒川洋平

【キーワード】　留学生交流支援制度、ショートステイプログラム、異文化体験型シラバス、eポートフォリオ

1．はじめに

大学の国際化をより広く推進するため、2011年度より文部科学省の留学生交流支援制度による「超短期プログラム[1]」が開始された。同プログラムには、日本国内の学生が海外に留学するショートビジット（Short Visit；以後SV）と海外の留学生が日本国内の大学に来て学ぶショートステイ（Short Stay；以後SS）プログラムとがあり、大学から申請して認められれば、参加学生はいずれも日本学生支援機構（JASSO）[2]から1カ月あたり8万円の奨学金が受給される。

本学の国際学術戦略本部（OFIAS）が大学全体の国際的な展開戦略を策定するとともに、海外拠点の運営、海外機関とのリエゾン、国際的な人的ネットワークの形成を行っているため、その下にSVSSワーキンググループ[3]が結成され、実質的な調査･コースの策定･募集等の準備にあたった。本稿は、今年度より始まったSSプログラムの実施及びその成果と課題について報告することを目的とする。

2．ショートステイ（SS）プログラムとは

ショートステイ（以後SS）プログラムは短期間であるという特徴だけでなく、これまで他大学でなされている事例などから、以下のような2つの役割機能があると考えられる。

2-1　集中講義型SSプログラム

本学の学年暦は2学期制であり、1学期1コマ[4]15週間を基本とする。日本人学生は春入学のみであるが、留学生は春と秋の入学がある。通常週1回開講されている授業を集中的に行う授業はいわゆる「集中講義」と呼ばれるもので、学期末などに、1週間程度開講される。1日5コマ×3日間の場合は、15コマで講義

の場合は2単位、演習（語学科目等）の場合は1単位となる。このような集中講義は日本語プログラムを日本で行わなくても、海外即ちJFL環境でも実施可能である。また、本学の全学日本語プログラム[5]を集中型にして、春学期受講者が次のレベルを夏季集中SSプログラムで3単位以上履修することができれば、短期交換留学生は1年間の短期留学で、春学期→夏季集中→秋学期と3レベル進めることになる。このような夏季集中プログラムは米国などの大学でしばしば開講されている。

2-2 異文化体験型SSプログラム

一方、日本語を母語としている人々が多く住む日本で開講する場合、JSL環境を活かしたプログラムが考えられる。それは、できるだけ日本語母語環境を生かしたインプット（視聴覚両方を含む）を大量に受容できるようにコースデザインすることである。Long & Sato（1983）の提唱する「インターアクション仮説」に基づけば、日本語母語話者との接触、インターアクションにより、言語習得が促進されると言える。また、外国語を学ぶということ自体が異文化接触とも言え、異文化理解をも目指したプログラムとなるであろう。

そこで、担当者は本学のSSプログラムを「異文化体験型シラバス」として進めることとし、日本語でインターアクションを頻繁にもてるように、コースデザインの工夫を行った。

さらにeポートフォリオ（以下e-Pと略す）評価を取り入れた結果、学習者の学習プロセスを通したパフォーマンス評価を可能にし、本学教員だけでなく、派遣元大学の教員も学生たちの体験とその内省を共有できるようになる。

3. 実施体制とシラバス・カリキュラム

3-1 実施体制

今回の取り組みの実施責任者は宮崎OFIAS本部長で、本部長から留学生日本語教育センターへのSSプログラム実施の依頼により、SSの学生は留学生日本語教育センター所属学生となることがセンター教授会において確認された。事務体制としては、留学生課長を中心に、留学生課留学生教育係、留学生生活係、センター事務係で業務の分担を行い、教育プログラムはセンターの教員4名[6]がセンター内WGとして準備・実施・フィードバックまでを行った。なお、日本語非常勤講師を8名採用した。本学大学院生にTAとしてクラス担任の日本語授業と

午後のe-Pの時間に入ってもらった。また、宿舎は外部の業者が経営する寮に入ることとなった。

3-2 対象学生

本プログラムは、2012年1月11日から2月9日まで、4週間の冬季集中プログラムで、大学間交流協定締結予定大学である以下の3大学から、初級後半以上のレベルを応募時の条件として、計25名を募集した。

①オーストラリア　メルボルン大学
②ニュージーランド　オークランド大学
③ニュージーランド　ヴィクトリア大学（ウェリントン）

1名キャンセルがあったため、①14名、②8名、③2名の計24名となった。

3-3 シラバス・カリキュラム

本プログラムは、オーストラリア（AUS）及びニュージーランド（NZ）の大学生のための短期集中かつ日本国内での日本語・日本文化プログラムである。そのため、実際場面で役立つ日本語と日本の情報を学ぶ午前中の授業活動と、学んだことをもとに実際に日本語を使用し、新たな疑問や失敗体験を翌日以降の午前中の授業で解決するという有機的なつながりを持てるよう、即ち午前･午後の活動が、円環的に機能するようにデザインすることを目標とした。そのため担当者が参考にしたのは、西野・川嶋（2010）が報告している国際交流基金関西国際センターでの短期日本語研修であった。そこでは地域リソースを活用した実践的な学習を中心に据えた体験交流型研修が行われており、その利点は、組織外の環境（地域リソース）を活用した活動であり、それは学習者の自信や意欲向上につながる。即ち、学習者の多様な背景やレベル差があっても意外にうまくいく、個別ニーズを持つ学習者への対応にも有効であるという。そこでSS実施前に、関西国際センターの岩澤和宏氏を招き、研修活動の具体的内容について、参考とすることができた。また同基金で作成した『日本語ドキドキ体験交流活動集』（凡人社）をSSにも活用することを決めた。

先述のような準備を経て、午前と午後の活動を有機的にリンクさせるよう授業設計を行った。午前中2コマ計40コマは日本語授業で、初中級・中級・中上級の3クラスに分けて行った。午後は日本文化講義や活動でタスク課題を出し、そのタスクを達成することによって成績評価とした。

シラバス・カリキュラムは専任教員が作成し、非常勤講師とのティーム・ティーチング体制で行った。各クラスメーリングリストを作成し、毎日ｅメールで報告・引継ぎを行った。大枠の時間割表は稿末資料を参照されたい。

4. 日本語プログラム（午前）の取り組みと課題

4-1 J1 クラスの実践と成果

J1 クラスは初級後半及び初級修了程度の学生のための初中級クラスとして設定された。プレースメントテストの結果、当初６名が J1 クラスにプレースされたが、２日目から J2 にプレースされた学生１名が来て、計７名の学生で構成された。オーストラリア、ニュージーランド国籍の学生に加え、インドネシア国籍の学生も２名おり、学生の専攻も建築から物理といったように、文系、理系の学生が混在していた。

主教材として『中級へ行こう』(2004) を使用した。副教材として、J1 ～ J3 共通で『日本語ドキドキ体験交流活動集』(2008) も利用した。

基本方針としては、中級入門の文型・語彙を学びつつ、午後に行われる日本文化体験活動や修了発表会に向けて準備をすることとした。具体的には、例えば、主教材から第１課「ファストフード」を学習し、それを活かして、午後の吉祥寺オリエンテーリングに活用させた。同オリエンテーリングでは「吉祥寺で面白いと思ったものを写真にとり、何が面白いのかを説明する；吉祥寺で見つけた、自国にはないファストフードの店を探し、何を食べる店か調べる」といったタスクを課した。e-P に、写真などをアップロードし、説明を加えた学生もいた。また、第２課では「地震」について学習し、午後の立川防災館訪問の準備とした。

副教材を用いた授業では、午後の日本文化体験活動に直結したトピックを選び、「地域オリエンテーリング」、「ご近所オリエンテーリング」、「ホームステイ」、「自己紹介シート」、「日本の小学校」、「小学校訪問」、「インタビュー」、「フィールドトリップ」、「若者ことば」等を扱った。

各自でテーマを決めて、本学の学生に学内で話しかけて、簡単なインタビューをするという課題を出した。「大学生とアルバイト」「家族」「好きな音楽」「外国語学習」「映画」などといったテーマでインタビューを行い、その結果をレポートにまとめた。吉祥寺オリエンテーリング・立川防災館訪問・小学校訪問といった午後の活動後も短いレポートを書かせた。

実際に授業を始めてみると、初級レベルで学習しているはずの文型が未習の学

生がかなりいることがわかった。しかし、教科書を途中で初級後半のものに変えることはせず、授業の中で、初級の未習文型を簡単に導入したり、学生に予習復習を課す指導をして対処した。幸い、7名の学生全員が非常に熱心に授業に取り組んでいたため、特に混乱なく進めることが出来た。

授業の最終日の修了発表会では、J1の学生は、このプログラムに参加している期間に経験したことで一番印象に残ったことを5分程度にまとめて発表した。ホームステイでの経験、日本で食べた食事、ショートステイ中に撮った写真などについて各人が発表を行った。

当初、J1の学生のほとんどが初級段階だったが、ショートステイが終わるころには全員、日本語運用力、特に口頭表現力が格段に進歩していた。

4-2 J2クラスの実践と成果

J2クラスは中級前半から後半の運用力を有する9人の学生で構成された。学生の専攻は経営学、建築、教育など多岐に渡り、事前データでは日本人との交流による日本語運用力の向上や、日本人と共同で進める活動などを希望していた。

上記に鑑み、本クラスにおいては、「言語活動を通じて目標文化ならびに母文化への気づきを促すこと」を目標に、コースデザインを行った。コースデザインにおいては、オーストラリアやカナダなどコモンウェルス諸国での言語シラバスを参考に、週ごとの言語活動のテーマを決め、それぞれ ①表現重視（expressive）②創造性重視（aesthetic）③実践重視（pragmatic）となることに配慮した。

また、本学外国語学部の日本人学生をボランティアとして採用し、それぞれの活動に参画してもらい、日本語のチェック、日本人としての考え方や価値観の表明、交通案内などの点で支援を依頼した。

まず表現重視の言語活動は、第2週に行った「日英のことばの比較・対照調査」である。上述の通り、ほとんどの学生の専攻は言語学以外であったため、音声や文法カテゴリーなど専門知識を要する調査ではなく、比較的取り組みやすい、意味に関する調査を選択するように促した。この活動の発表は第2週の最終日に行われた。学生は3グループに分かれて「日本語と中国語の慣用句」「動物の慣用句」「身体表現のイディオム」について、PPTを用いた発表および質疑応答を行った。ここでも日本人学生ボランティアにコメントや感想を求め、協力を仰いだ。

次に創造性重視の言語活動は、第3週に行った「オリジナルのコマーシャルフィルム（CF）作成」である。これはJ2クラスの日本語担当インストラクターである、

山田しげみ講師が国際交流基金において日本のCFを用いた教材作りに関わったこと、また同じく中島久朱講師が、本学の国際教育プログラム（ISEPTUFS）において、日本人と留学生によるCF作成のプロジェクトに関わったという経緯から実現したものである。

この活動の発表は第3週の最終日に行われ、学生は前週と同様、3グループに分かれて、コンビニエンス・ストアのイメージ向上のCF、架空のシャンプーのCF、架空のガーゼ付き絆創膏のCF作成を行った。学生たちは日本人ボランティアの協力のもと、宣伝すべき製品の選択、コンセプトの決定、CFの脚本作成、撮影、音声および動画の加工・編集をすべて行った。本活動は規模や時間あるいは手間という点でJ2クラスの活動の白眉というべきものであり、学生の希望も聞いたうえで、クラス発表会はこの上映と解説を中心に据えた。

なお、CFのうち、コンビニエンス・ストアのイメージ向上を目した一編は、教室内の活動と社会を結びつける試みとして（株）セブン-イレブン・ジャパン（東京都千代田区）に送付し、同社より以下のようなメッセージをいただいた。

- お客様が精神面、実質面で窮地に立たされたとき、セブン－イレブンを頼って頂くという内容は、非常にありがたく感じました。
- セブン－イレブンが提唱する『近くて便利』の「近く」は『物質的な近さ』だけに留まらず、『精神的な近さ』も訴求しておりますので、その様な視点からも、今回の広告ビデオは嬉しく思いました。
- BGMやカメラワークも、素人の域を出た良い作りだったと思います。

これらを学生に伝えることで、達成感の付与の一助とした。

最後に実践重視の言語活動は、第4週に行われた、日本人学生へのインタビューである。本活動は教科書内のトピック「住宅」に即して、日本人とオーストラリア人／ニュージーランド人の住環境に対する意識の違いを、インタビューという手法で浮き彫りにするものである。本活動はプログラムの最終週にあたり、本プログラムで向上させた運用力を日本人とのインターアクションの中で実感するために、日本人ボランティアの協力は極力少なくとどめた。

この活動の発表は第4週の最終日に行われ、学生は前週・前々週と同様に3グループに分かれ、日本人の住みたい町とその理由、現在の部屋や住環境への満足度、海外生活の希望といったトピックについてインタビュー結果をまとめ、報告した。海外生活に関する質問は、J2クラスは半数近くの学生が大洋州諸国への

移民であるため、特に関心を持つトピックであることが表明された。

4-3 J3クラスの実践と成果

J3クラスは中級後半程度の運用力を有する8名の学生から構成されており、J2と同じテキストを用いた。本センターのJLC日本語スタンダーズに基づいたcan-do項目として、「レジュメに沿って発表できる」「談話の展開をモニターしながら、結束性・一貫性のある話ができる」「根拠を挙げながら自分の意見が述べられる」「グラフや図表を活用して説明できる」「インタビューを通して相手の言いたいことを理解し、わからないことを指摘できる」を授業活動目標とした。自分でテーマを決め、日本人にインタビューし、その結果をまとめ、考察した内容を修了発表会で発表するということを最終目標とした。授業では、以下のような「トピック」をとりあげ、〈アカデミック・タスク〉を課した。

1)「教育」: 日本の教育制度と母国の教育制度の比較対照〈発表・作文〉
2)「言葉」: 好きなことわざとエピソードを記す作文、グラフの読み取りと説明の練習〈発表・説明作文〉
3)「コミュニケーション」: アンケート作成の練習〈一貫した内容〉
4)「住宅」: インタビューの練習〈相手に失礼のないやりとり〉

『日本語ドキドキ体験交流活動集』から以下の部分を抜粋して、午後の活動のための準備を行った。

1) ご近所オリエンテーリングのための準備：地図の説明のしかた、店の人への尋ね方など。
2) 吉祥寺オリエンテーリングでのタスク：自国の店と日本の店との違いを5つ探してくる。行列をなしている店はなぜそうなのかを調べる。日本人と一緒に写真を撮る。「いせや」というやきとり屋でやきとりを食べるなど。
3) 小学校訪問準備：「自己紹介」の練習。小学生に出すクイズを考える。「小学校訪問で発見したこと」という作文(400-600字)を書く。
4) 各自テーマを決めて、日本人にインタビューやアンケートを行い、それをデータ化し、考察を加えた内容を「修了発表会」で発表した。発表時間は1人5～7分程度。各人のテーマは以下のとおりである。

①アニメとアニメオタクに対するイメージ　②初音ミクの人気度
③日本のストリート・ファッション　④日本の首相はどうしてよくかわるのか

⑤外国語を勉強することについて　⑥Boys Loveはなぜ人気があるのか
⑦温泉に入るとき－日本人と外国人の比較－
⑧「SOPA」という著作権侵害を防ぐ協定は必要か

5. 文化コーディネーターの取り組みと課題

5-1 午後の活動の概要

3-3で述べたように、午前中の授業活動と学んだことを午後の活動で実際に使用し、新たな疑問や失敗体験を翌日以降の午前中の授業で解決するという有機的なつながりを持つようにデザインした。

参考にした関西国際センターのプログラムでは、教室外活動（地域オリエンテーリングなど）には、学習者がグループで行動し、教員は引率、同行しない。そのため緊張感を持って準備をし、自力で活動を遂行するので、達成感も大きいことが学習効果につながっているという。岩澤氏によれば、これまで一度も事故は起きていないとのことであった。しかしSS担当者にはそこまで学習者任せにしても良いものかという危惧があった。参加学生の多くは、初来日の20歳前後の若者であり、短期滞在のため携帯電話を持たず、何かあった時の混乱が心配であった。また午後の学外での活動は、教員からタスクが与えられており、授業活動に準ずるものであると考えるのか、あくまで放課後の自由時間内での宿題遂行に過ぎないのか、という活動の位置づけの問題があった。

5-1-1 サポーター制度の利用

今回は上記の点が曖昧なままプログラム実施となってしまったが、その問題を「サポーターシステム」によって乗り切ろうと考えた。つまり、本学においては以前より、留学生にとっても日本人学生にとっても、互いの交流の機会が限られているということが問題となっていたこと、国際交流基金では利用しにくい日本人学生を人的リソースとして活用することで、本プログラムの特徴となりうることなどを考慮し、学部生をサポーターとして採用することにしたのである。

さらに中心的活動内容に関しては、関西国際センターのプログラムを参考にするが、それ以外の課外活動は学部生に企画してもらうことにした。そうすることで、留学生が関心を抱きやすい若者の関心事を午後の活動に盛り込ませることができ、さらに学部生が責任感と自主性を持って交流の機会を活用できるのではないかと考えたのである。

サポーターには、TOFSIA（本学の国際交流サークル）や学生ボランティア組織などから約20名の応募があり、彼らから多くの企画が提案された。しかし具体化まで話を進めるのはなかなか難しかった。それには以下のような理由が考えられる。

①教員も学生も初めてのことで、SSプログラムの午後の活動のイメージ（たとえばどのくらい希望者が出るか、時間的余裕はどのくらいあるか、どのように午前中の授業と連携させていくのかなど）がつかめていなかった。

②面白いアイディアを考えても、それを実行するとなると、様々な制約（移動時間、引率の方法、費用など）があることに気づいた。

③学生側は自分の授業があるために、事前に全員が集まってお互いの意見を交換し、協力し合うための機会がなかった。その結果、一つの企画に他の学生が協力して、実現化させることが難しかった。

④学部生は、2月中旬に学部の学年末試験期間があり、1月末位から交流活動に力を注げなくなった。

次に以下、(1) 授業活動の延長として、より密接に授業に関連する（基本的に全員参加の）中心的学外活動、(2) 自由度の高い（希望者が参加する）放課後、週末の学外活動とに分けて説明する。

(1) より密接に授業と関連する午後の学外活動の場合

これらはプログラム策定の早い段階で学外活動として位置付けられたものである。「吉祥寺オリエンテーリング」「立川防災センター訪問」「ご近所（多磨駅周辺・新小金井駅周辺）オリエンテーリング」「小金井東小学校訪問」「白糸台小学校訪問」「府中節分祭」などがある。このうち吉祥寺及びご近所オリエンテーリングには日本人学生が、その他の活動には教員が引率を行った。こうした活動については、事後アンケートにおいて、比較的高い評価を受けたものが多かったが、「ご近所オリエンテーリング」の評価が低かった。これについては、行き先の変更、課題の変更などを含め、改善が必要であろう。

(2) 自由度の高い学外活動の場合

学部学生が企画、実施したものとしては、「料理教室」「ジブリ美術館見学」「原宿・渋谷ツアー」「ディズニーランド訪問」などがあった。どれも参加者が多く、盛況であった。ただし以下のような問題点もあった。

①直前まで参加者人数が確定できなかったり、参加するかどうかの確認がとりにくかったことなどが、企画学生に負担となった。

②当初はサポーターをチューター謝金で雇用することで、活動費（引率の際の交通費や活動実施にかかる実費）の一部に充てることを考えたが、活動の多くが、チューター活動（たとえば、学習支援や日本の古典的文化体験の補助）とは認められず、結果的に学生たちの持ち出しになってしまった。

これらは、今後解決していかなければいけない課題である。

5-1-2 ホームビジット

もう一つ、忘れてはならない活動として、ホームビジット[7]（以後HV）がある。HVはホームステイ（以後HS）と共にぜひSSに盛り込みたい活動であると全担当者は考えており、本学学生後援会に働きかけ、広く受け入れ可能な日本人家庭を募ることになった[8]。また近隣の家庭にも呼びかけ、参加をお願いした。しかし今回の超短期プログラムでは、HSは時間的にも準備面でも難しいことなどから、HSは実施しないこととなった。またHVであっても東京あるいはその近県以外は訪問が難しいことなどから、学部生の保護者で遠方からの申込者には、せっかくの厚意を無にする形となってしまった。また今回は申込者の情報管理を留学生課が担当したが、家庭・学生・教員・留学生課間での最新情報の共有がうまくできないこともあった。今後、通年にわたるHS/HV プログラムを実施する場合には、こうした協力者の情報を一元的に管理する部署が必要になるし、家庭と学生の振り分けや調整などには十分な配慮が欠かせないといえる。

HVは重要な日本体験活動であるが、訪問の日時や待ち合わせを決める連絡をすることも、学習活動の一環と位置付け、学生にさせることにした。中級者以上には電話をかけさせ、初級者にはメールを書かせたりして準備をした[9]。その際問題となったのは、お互いの都合がつかなかったり、どちらかが日時の変更を希望したりした場合の調整が難しかったことである。今後も注意すべき点である。

学生一人一人の体験[10]については十分に把握できていないが、事後アンケートでは、午後の活動の中でもHVは非常に高い評価を受けていた。協力して下さったご家庭に深く感謝するとともに、今後も更なる充実を図るようにしていきたい。

5-2 成果と課題

全体として、午後の活動は、その種類においても内容においても、たいへん充実したものであり、留学生の積極的参加と学部生の献身的協力のおかげで非常に有意義なものとなった。午後の活動に対する留学生の事後評価は総じて高く、そ

れがプログラム全体の肯定的評価に少なからず影響していると思われる。本プログラムの方針である、学校外の活動を学習の重要な一部として位置付けることには成功したと言えるだろう。

しかし午前中の授業活動がどれだけ生かされたか、午後の活動からどのような疑問や問題が浮かび上がり、それを午前中の授業でどう解決したのかといった具体的な部分までは、教員間のコミュニケーションが時間的制約から十分に行えなかった。また担当者自身、次項のｅポートフォリオ導入の混乱もあり、十分文化コーディネーターとしての役割を果たせなかったと反省している。次回には心して備えたい。

6. ｅポートフォリオ（e-P）の導入

6-1 ポートフォリオについて

今回、試験的にe-ポートフォリオ（e-P）[11]を導入した。ポートフォリオとは、自分の活動（仕事、教育、学習など）の記録を時系列や系統別にまとめ、一冊にファイリングしたものであり、内省の材料にしたり、他者（たとえば顧客、上司、教師など）に学習の成果を示したりするのに利用するものである[12]。最近はそれを電子媒体として保存するe-Pが開発され、持ち運びが便利になり、学習者同士が見せ合い、学び合う活動も盛んに行われるようになってきた。

これは、学習者中心の自律的・能動的学習、継続的学習、ピアアセスメント、学習コミュニティといった近年盛んになってきた構成主義下の学習理論や学習形態と親和性が高く、さらにEU圏内で見られる言語パスポート[13]的役割も担うことができるものである。また今回の学生たちは各自大学に戻った後、本プログラムでの学習を所属大学で単位化してもらうことを望んでいる。そこで本プログラムでの具体的な学習活動が、e-Pによって可視化されれば、所属大学の教員がそれを参考にした上で、成績判定を行うことができるといった利点も考えられた。

6-2 e-PシステムMaharaについて

本プログラムではMahara[14]というe-P作成システムを採用することにした。理由はこのシステムがオープンソースソフトウェアであり、導入コストが抑えられること、既に日本の幾つかの大学で導入例が見られ、サポートが得られるかもしれないと思われたこと、もともとNZを中心に開発されており、参加学生の中で既知の者がいたり、帰国後も使用し易かったりするかもしれないと予想された

ことなどである。

6-3 開始前の問題点

しかし実際に本学サーバーにMaharaを導入し、運用できるまで準備をするというのには、時間も人的リソースも不足しており、断念せざるを得なかった。結局、外部業者と契約し、学外サーバーにシステムを設置して運用することになったが、これに要する予算は当初のプログラム予算には計上されていなかったため、特別予算を申請する必要が生じた。

こうして設置に時間がかかったこともあり、担当者自身がプログラムに慣れる時間が確保できなかった。そのため、プログラムに参加する他の教員に、e-Pの利用の意義と利用方法を理解してもらうことができなかった。また初めての取り組みのため、どの程度e-Pが活用できるかが不明だったこともあり、各学生のポートフォリオの内容をどう学習の評価に組み入れるかについて、教員間で事前に共通認識を持つことができなかった。

6-4 実施の状況

Maharaはオープンソフトで、さまざまな場面での利用に対応している分、全体として複雑な構造になっている。基本的な使用方法について、筆者が十分に学習者に説明できなかったこともあり[15]、コツを呑み込んでどんどん記入していく者と最後まで利用に消極的な者との差が開いてしまった。また自国からPCを持参した者は、寮で毎日のように記録をつけていくことができたが、持参しなかった者は、1週間に1度のe-Pの授業時間に利用するしかなかった。超短期プログラムでのe-P導入の難しさを痛感することとなった。

一方教員側も、e-Pの意義とMaharaの利用方法について周知する機会が事前になかったため、一部の非常勤教員と教務補佐（大学院生）以外の利用（閲覧及びコメント書き込みなど）はほとんどなかった。担当教員が日常的に訪れ、コメントを残してくれるかどうかは、学習者の動機づけに大きく影響する。しかし、専任教員は他のプログラム・通常業務に加えて、SSを担当したため、現体制ではMaharaのための時間確保は難しいと思われる。

6-5 評価に関して

e-Pは学習の経過や学習者の内省と改善の取り組みが、明確に見えることが特

徴である。それをいかに学習の評価としていくかについては、まず個人の目標設定があり、継続的な「セルフアセスメント（自己評価）」「ピアアセスメント（他者評価）」が重要なポイントとなる（森本 2008）。

今回の実施においては、e-P の利用が実際にどこまで可能なのか不明なままの試行であったため、当初から本プログラムの成績評価には組み込まれなかった。しかし派遣元大学の担当教員からは、「たいへん良い試みであり、こちらでの評価の判断材料として有用である。プログラムの内容と学生たちのパフォーマンスが見えるので、今後もぜひ実施してもらいたい」とのコメントを複数受けた。

今後 e-P の利用を進めるためには、積極的に評価に反映させられるコースデザインが不可欠だが、学習者による自主的な目標設定及びその目標への努力を具体的にどのように評価できるのかという非常に厄介な問題があることにも、教員側は気づく必要があろう。

7. 終わりに

今回のような超短期のプログラムは初めての取り組みであり、教員間・事務と教員の連絡体制の問題などまだ課題はあるものの、ある一定の成果が残せたのではないかと思われる。何よりも嬉しかったのは、学生たちがほぼ満足し、自分の日本語に自信を持てる機会となったことである。動機付けが高いと、人間はこれだけ成長できるのかと驚嘆した。修了した学生から「東京外大の大学院に入りたい」「日本の理工系の大学院に進みたい」という声も聞かれた。今後日本の短期・長期留学生になる契機となれば幸いである。今回の反省を踏まえ、より良いプログラムを目指し、さらに今後オセアニア地域以外の学生へのニーズ調査等も行って、SS プログラムの重層化を図りたいと考えている。

注

1 留学期間は 3 カ月未満。

2 独立行政法人 Japan Student Services Organization の略。主に学生に対する奨学金貸与事業や留学支援、また外国人留学生の就学支援を行っている。

3 OFIAS の下部 WG として、SVSS WG が結成され、宮崎 OFIAS 本部長、丹羽泉（ISEP 担当で主に SV 担当）、岡田昭人（ISEP 担当で主に SV/SS 担当）、藤森弘子（留学生日本語教育センター SS 日本語プログラムコーディネーターチーフ）教員、中田多美留学生課長の 5 名があたった。2011 年 2 月 2 日に第一回会議を開催し、当

初夏季開催を予定していたが、3.11. 東日本大震災のため、夏季開催は不可能となり、冬季開催を目指しリサーチした。その結果、休暇期間が合致するオセアニア地域を対象とした。宮城徹（今回のSS募集地域調査及び交渉担当、SS文化コーディネーター）、中村彰（SS日本語プログラムコーディネーター）教員も加わり、具体的なコースデザインの検討を行った。

[4] 1コマ90分である。

[5] 本学の交換留学生・日研生・教研生・研究留学生などを対象とした日本語初級から超級まで8レベルを有した日本語プログラムで、2004年度から開講されている。

[6] 午前の日本語クラスは3クラス体制で、J1（中級入門）：中村彰、J2（中級）：荒川洋平、J3（中級後半）：藤森弘子が担当し、午後の課外活動のコーディネート及びeポートフォリオ、学生チューター・ボランティアのまとめ役を宮城徹が担当した。なお、本論文の1・2・3・4-3・7章は藤森、4-2は中村、4-3は荒川、5・6章は宮城が執筆した。また、午後の日本文化講義として、「HAIKU」を菅長理恵教員に、「KANJI」を善如寺俊幸教員にお願いした。

[7] 放課後や週末など、数時間日本の家庭を訪問し、一緒に過ごす体験をすること。

[8] 10月の学生後援会理事会に出席し、主旨の説明および協力をお願いした。さらに外語祭期間中に行われた保護者説明会後にブースを設置し、質問、申し込みを受け付けた。

[9] 今回は、HVを当初から拒んだ者が1名、結果として訪問しなかった者が2名いたが、個人の意思を尊重し、あえて強制したり、強く勧めたりはしなかった。

[10] 本来であれば、こうした記録が次項のeポートフォリオに残されるべきであったが、十分な時間がないまま終了した。

[11] 本プログラムにおけるeポートフォリオ活動については、宮城（2012）を参照されたい。

[12] 本プログラム実施にあたって参考にした、国際交流基金関西センターの日本語研修においても、ポートフォリオは中心的役割を果たしている（石井・熊野、2010）

[13] http://www.jpf.go.jp/j/publish/japanese/euro/pdf/01-4.pdf

[14] https://mahara.org/　参照のこと。このサイトでデモ版を体験できる。

[15] 開始直後に『Maharaの使い方（マニュアル）』を作成したが、十分でなかった。
http://eport.f-leccs.jp/view/view.php?id=1849

〈資料〉SS ウインタープログラム 2012 スケジュール表

TUFS Short Stay Winter Program 2012 スケジュール表　2012.01.10.

		8:30-10:00	10:10-11:40	11:40-12:40	12:40
2012/1/11	水		開講式10:00－（さくらホール） 全体オリエンテーション コンピュータ・オリエンテーション		ウエルカム・パーティー プログラムオリエンテーション キャンパス・ツアー
2012/1/12	木	総合日本語	総合日本語	TOFSIAランチ	チュートリアル
2012/1/13	金	総合日本語	総合日本語		吉祥寺オリエンテーリング
2012/1/14	土				茶道入門（オプション）13:00-15:00
2012/1/15	日				
2012/1/16	月	総合日本語	総合日本語		eポートフォリオ
2012/1/17	火	総合日本語	総合日本語		防災センター訪問
2012/1/18	水	総合日本語	総合日本語		ご近所オリエンテーリング
2012/1/19	木	総合日本語	総合日本語	TOFSIAランチ	
2012/1/20	金	総合日本語	総合日本語		小金井東小学校訪問
2012/1/21	土				
2012/1/22	日				
2012/1/23	月	総合日本語	総合日本語		eポートフォリオ
2012/1/24	火	総合日本語	総合日本語		
2012/1/25	水	総合日本語	総合日本語		KANJI（善如寺）Rm.107
2012/1/26	木	総合日本語	総合日本語	TOFSIAランチ	KANJI（善如寺））Rm.107
2012/1/27	金	総合日本語	総合日本語		白糸台小学校訪問
2012/1/28	土	日本文化研修旅行＜日光＞			
2012/1/29	日				
2012/1/30	月	総合日本語	総合日本語		eポートフォリオ
2012/1/31	火	総合日本語	総合日本語		チュートリアル
2012/2/1	水	総合日本語	総合日本語		HAIKU（菅長）Rm.107
2012/2/2	木	総合日本語	総合日本語	TOFSIAランチ	HAIKU（菅長）Rm.107
2012/2/3	金	総合日本語	総合日本語		府中節分祭り
2012/2/4	土				
2012/2/5	日				
2012/2/6	月	総合日本語	総合日本語		eポートフォリオ+アンケート
2012/2/7	火	総合日本語	総合日本語		プレゼン・リハーサル（さくらホール）
2012/2/8	水	修了発表会			
2012/2/9	木	閉講式、フェアウェル・パーティ			
2012/2/10	金	帰国			

使用教材

平井悦子他（2004）『中級へ行こう』スリーエーネットワーク
安藤節子他（2009）『トピックによる日本語総合演習　中級後期』スリーエーネットワーク
国際交流基金関西国際センター（2008）『日本語ドキドキ体験交流活動集』凡人社

参考文献

石井容子・熊野七絵（2010）「国際交流基金レポート：自律学習支援とポートフォリオ評価」『日本語学』Vol.29-15　明治書院 66-79

西野藍・川嶋恵子（2010）「国際交流基金レポート 12：体験交流活動を通じた学習のデザイン」『日本語学』Vol.29-13　明治書院 98-107

藤森弘子（2012）「超短期プログラムにおけるタスク型活動とｅポートフォリオの試みについて」『日本語教育国際研究大会予稿集』第一分冊 104

宮城徹（2012）「超短期留学生受け入れ日本語・日本文化プログラムでの Mahara 利用の試み」『MOF2012 講演論文集』19-23
http://eport.f-leccs.jp/view/view.php?id=1849

森本康彦（2008）「ｅポートフォリオの理論と実際」『教育システム情報学会誌』Vol.25, No.2, 245-263

Long, M. and Sato, C.（1983）"Classroom foreigner talk discourse: forms and functions of teachers' questions." In Seliger, H and Long, M.（eds.）*Classroom-oriented Research in Second Language Acquisition*. Rowley. M.A. Newbury House.